

品川の富士講

中世の品川と富士信仰

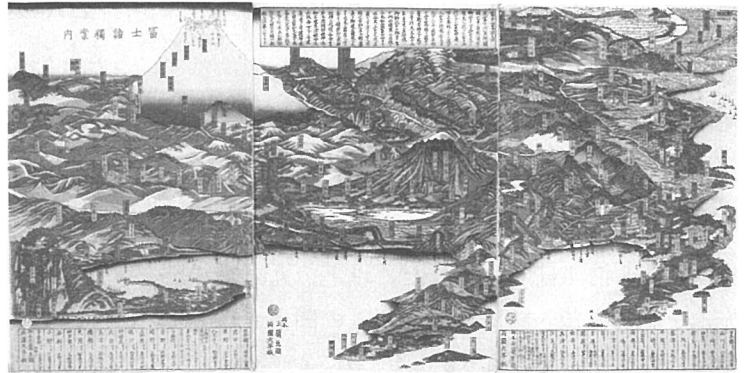
日本には、富士山、御嶽山、白山、立山、大峰山といった霊山を崇める山岳信仰が古くからあった。日本一の霊峰富士は、『万葉集』などに和歌として詠まれ、古くから信仰があった。

時代とともに富士信仰の形態は変化していったが、鎌倉幕府を樹立した源頼朝は、建久4年（1193）に富士の裾野で巻狩（山麓に生息する鹿や猪を狩ること）を行い、将軍権力の誇示に利用したとされる。なお、『真名本曾我物語』によると、この巻狩の折、頼朝が「品河宿」に立ち寄ったとの記述がある。

文明2年（1470）、日蓮宗の僧・日親が記した『伝燈抄』には、南品川の妙国寺（現、天妙国寺）の檀越として品川湊の繁栄を支えた熊野出身の有徳人鈴木道胤が、毎年6月に代官を6人ずつ富士に派遣したとある。室町時代には、富士登山をすることで災難から逃れられると信じられ、参詣対象となった。

江戸八百八講と富士塚

江戸時代、富士山を対象とする民間信仰が広がりを見せ、各地に富士講が結成された。これは、信仰だけでなく、親睦と娯楽を兼ねた団体であり、江戸周辺に「江戸八百八講」といわれるほど多くの講ができた。彼らは、富士山の神（浅間神）を祀るとともに富士登山への遙拝と、模擬登山の場として人工富士「富士塚」を多く築造した。古墳を利用したもの（北区十条富士塚）を含め、江戸時代に築造された富士塚は、東京都内で20を数える。現在、品川神社境内にある「品川富士」（品川区指定文化財）は、品川



▲「富士詣独案内」歌川貞秀（橋本玉蘭）画 安政6年（1859）品川歴史館所蔵

宿の丸嘉講の講員の手によって明治2年（1869）に造られたものであるが、活動自体は江戸時代から続いていたと考えられる。

品川富士の山開き

富士講は地域別に結成されたが、品川宿の丸嘉講と山清講は一つの講から分かれた枝講である。品川にはかつて6つの講社があったが、現在は丸嘉講のみが活動をしている。現在では丸嘉講の講員の高齢化が進み人数も減ったが、最盛期には300人を超える講員がいた。この当時活動の柱は、品川富士の山開き行事と、7月下旬から8月上旬に行った富士登山であった。その他、毎月1回不定期な日に、月拝み（祝詞を上げること）を行なった。富士登山の山開きは、毎年7月



▲品川富士の山開き行事（品川区指定無形民俗文化財）

1日に行われ、講員が山の脇にある浅間神社に
行衣と呼ばれる白装束で集まるところから始ま
る。そして品川富士に登山し、中腹にある小御
嶽神社（小御嶽石尊大権現）や山頂で、拝みを行
った。

昭和10年代の富士登山

富士登山は、丸嘉講ではヤマと呼ばれている。
登山は現在行われていないが、最盛期には2泊
3日から3泊4日で行われた。以下、丸嘉講の
先達を務めた故・榎本治郎氏よりの聞書から登
山の行程を追ってみよう。

毎年6月になると、山の麓で参詣者の宿泊の
世話をする御師と呼ばれる人が挨拶に講元を訪
れた。講と御師の関係は固定しており、丸嘉講
の御師は富士吉田の菊谷であった。6月下旬、品
川神社内にある御嶽神社の行者に登山の日取り
の伺いをたてた。行者の決めた日取りを外して
山に登ると、山が荒れると伝えられていた。

榎本治郎氏が初めて富士山に登った（初山）
のは、12歳の小学校6年生の昭和12年（1937）
だった。初山の年齢は特に決まっていなかった。
この時は一行30～40人くらいで品川を朝早く
出発し、菊谷に入った後、足慣らしで約5km先
の吉田胎内まで徒歩で往復した。

その日は菊谷に一泊し、翌朝4時頃に出発。行
衣を着て、中道杖を手にした。まず富士吉田の
北口本宮富士浅間神社に参拝し、その後、バス
で標高1,420mの馬返まで行き、そこから吉田



▲昭和初期の富士登山の様子
（榎本治郎氏提供）

口登山道を登り始め
た。乗物は菊谷の2人
の強力に任せたので、
手に持つのは水筒と
おやつくらいだった。

途中、経ヶ岳（標高
2,386m）の六角堂で
手を合わせ、山頂（同
3,776m）に着いた後、

時計回りにお鉢を周
り、測候所（平成16
年閉鎖）の近くにある
「お穴の拝所」で拝み
をした。

ここでお鉢巡りを
する人とお中道をす
る人に分かれ、お鉢
巡りの人たちは、お
鉢を先に進み、登っ
てきた吉田口登山道
を下り、丸嘉講の定
宿になっている8合
目下の蓬莱館に宿泊

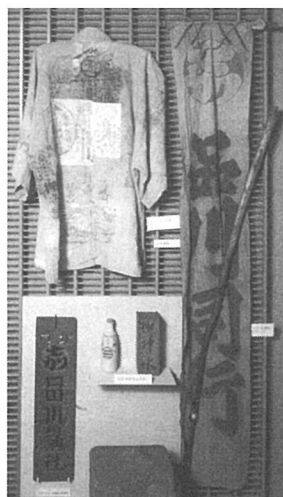
した。一方、榎本氏をはじめお中道をする人た
ちは、御殿場口登山道を下り、標高2,702mの宝
永山の岩室（現存せず）に泊まった。

翌朝、お中道を時計回りでまわり、難所であ
る大沢の渡し場（現在通行不能）を渡る前に、
拝みをした。そこをわたると、講員が「イキツ
ギの茶屋」と呼んでいたお助け小屋（現存せず）
があり、ここで例年のお中道回りと同じように、
昼食にうどんを食べた。

お助け小屋では、菊谷からもらった布に「オ
ユルシの印」を押してもらい、それを後日行衣
に縫いつけた。また、紙もらい、中道杖の突
く方に被せ、水引で縛り、以後使わないように
もした。

さらにお中道を進み、午後3時頃に小御嶽神
社に着き、吉田口登山道を下りてきたお鉢巡り
の人たちと合流して拝みをした。そして吉田口
登山道から下山し、菊谷に3泊目の宿をとり、
翌日品川に帰った。

後日、山頂で汲んだ金銘水を徳利のような容
器に入れ「御神水」として講員に配り、この時
講費を集めた。講費の徴収は年1回、この時だ
けだった。



▲行衣、中道杖など富士講関
係史料（榎本治郎氏寄贈・品
川歴史館所蔵）